

## 『大乘莊嚴經論』注釈書における agotra

龍谷大学 早島慧

一切の衆生が救済の対象となるのか。この点は、仏教における重要な問題であろう。瑜伽行派は、この問題について「種姓 (gotra)」という概念を用いて説明していく。彼らは衆生を、声聞・独覚・菩薩という三乗の種姓の者、不定種姓の者、そして、救済の対象とはならない無種姓の者として区別し、救済の対象とはならない者の存在を論じるのである。この五つの種姓の体系が、後代「五姓格別」として論じられることはよく知られているところであるが、無種姓の者の位置付けについては、『大乘莊嚴經論』注釈書において特徴的な解釈が確認される。本発表では、『大乘莊嚴經論』諸注釈書における agotra (無種姓) の解釈を考察し、agotra なる衆生が、救済の可能性が完全に否定された者であるのかという点を検討する。

agotra という概念と関連して、『瑜伽師地論』には agotrastha という語が散見される。先行研究によって既に指摘されているように、agotrastha に先行する gotrastha (種姓に立脚する者) の否定概念であって、「種姓に立脚しない者」を意味すると考えられる。つまり、高崎直道氏が指摘したように、原始經典における gotrabhū (種姓人) が、その後修行道における階梯の名称として用いられることとなり、さらに、gotrabhū という階梯が〈般若經〉等において gotrabhūmi (種姓地) という階梯として展開し、瑜伽行派においては、「この gotrabhūmi に入ったこと」が『瑜伽師地論』において gotrastha として表されるのである。そして、その否定概念が「agotrastha (種姓に立脚しない者)」である。

この agotrastha (種姓に立脚しない者) について、『瑜伽師地論』は「種姓が存在しない者」と説明する。この解釈は、『瑜伽師地論』の解釈を継承する『大乘莊嚴經論』にも受け継がれることとなるが、その注釈書においては『瑜伽師地論』以来の伝統とは異なる解釈に発展していく過程が確認される。

この点について、本発表では無性、安慧の注釈、そして新出の梵文写本に基づき考察を行う。具体的には、『瑜伽師地論』以来の a-gotrastha (種姓に立脚しない者) という概念が、agotra-stha (agotra に立脚する者)、そして agotra へと『大乘莊嚴經論』注釈書において展開していくことを明らかにする。この展開を考える上で重要な点は、否定辞 a の解釈である。この否定辞 a の解釈が多様化する中で、「種姓が存在する agotra」が論じられることとなる。本発表では、否定辞 a の解釈に着目し、agotra なる衆生が救済の可能性が完全に否定された者であるのかという点を検討する。

<キーワード>gotra、種姓、『大乘莊嚴經論』